空の青は、青春の青。

零雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空の青は、青春の青。

【Ｎコード】
Ｎ０７９７Ｇ

【作者名】
零雅

【あらすじ】
ある日の他愛もない夢。白い世界にたたずむ俺と知らない彼女。彼女に言われるまま意識を交換することに。それが間違いだった。本当に全て入れ替わってしまったのだから！！

始まりの夢

「私は、普通じゃないのよ」

彼女は、そういった。

「どこが？」

「全てが」

少しだけその返答に困ったが繰り返し質問を続ける。

「例えばどのへんが？宇宙人だったりする訳？」

「そうじゃないわよ。私って言う存在そのものがおかしいの。たぶんあなたとも違うわ」

「ふぅん。俺には、そうは見えないけど」

「きっと見えないだけよ」

彼女は、普通だ。

それなりに可愛いしコンプレックスだってなさそうだ。

…それのどこがおかしいんだ？

「おかしいのよ。私の未来も過去もおかしいわ。

きっとあなたが私になったら分かるわ」

「そんなの無理だろ」

「無理だって思ってる所が普通なのよ。

私には、無理だって思えないの。絶対に出来る」

…確かに普通じゃない

俺は、彼女の仲の普通じゃなさを少なからず一つだけ見つけた。

でも彼女は、普通だ。

「そんなに疑うなら入れ替わってみる？」

「出来るのか？そんなこと」

「出来るわよ。意識交換って奴？手順は、一つだけ」

「何をすれば良いんだ？」

ニコっ。彼女は、笑った。

実に嬉しそうだ。

「飛ぶのよ、ここから」

彼女と俺の二人しかいなかった空間に突如屋上が広がった。

しかし、俺は驚かない。

「二人で？」

「えぇ、一緒に飛ぶの。

次の日には、すっかり入れ替わってるわ」

「…面白そうだな。今からやってみるか？」

「そうね。試してみよっか」

俺は、彼女の手をとった。

「行くよ」

「うん」

うなずいた彼女の姿を確認して俺は、屋上から飛び降りた。

落ちる途中、彼女の顔がチラリと見えた。

その顔は、天使の微笑からは一転し悪魔のような笑顔に変わっていた。

そこで俺達は、夢から覚めた。

…変な夢。

目覚めは、悪りーし内容もはっきり覚えてる。

おまけに落ちてる時の感覚も覚えてる。

…最悪。

とりあえずいつもの時間に起きる。

ぐ　ら　っ

目前もする。

ちょっと立てそうもない。

学校…休むか…。

髪をかきあげる。

いきずまった時ついやってしまう癖。

……？

俺、こんなに髪長かったっけ？

比較的髪は長いほうだけどこんなに長いはずがない。

おかしい。

それに良く考えてみれば、ここどこだ？

知らない場所。

まるで夢の中だ…。

でも、このあとどうすれば良いか俺は知ってる。

いや、体が覚えてるんだ。

熱のせいか？

起き上がって机へ向う。

その先には、鏡があるはずだ。

覗き込む。

そこには、俺の知ってる顔。

でも、俺の顔じゃない。

髪の毛も目の色も体型も…

全部が違う。

「待てよ…。ありえねーだろ…こんなの…」

夢じゃない。

でも、現実でもない。

これは…いったいなんだ？

この家は、たぶん二階建てだ。

扉を開ける。

この階段…

覚えてはないけど使ったことがある。

やっぱり俺はこの場所を知ってるんだ。

今、家には俺しかいない。

うん。これも知ってる。

一階の部屋は、ガランとしてシンプルだった。
その後、この家を見回って分かったことがある。
この家は、俺の家じゃない。
けど俺は、この家を知っている。
そしてこの顔は、夢の中の女の子の顔。
間違いない。
俺達は、入れ替わってしまったんだ。
本当になった。
本当に入れ替わってしまった。
そうしたら、俺の姿をした彼女は今どこに？
同じように俺の家に居るのか？
彼女は、きっと俺のようにうろたえてはいない。
彼女は、入れ替われると知っていた。
ということは、前にも一度入れ替わって事があるんだ。
それを知った上で俺と入れ替わった。

何のために？

その前になぜ夢の中で入れ替わった？

あれは、ただの夢だったはず。

それとも今こうしていることが夢なのか？

しゃーない。学校へ行って俺に会おう。

そしてもう一度入れ替わって本当の俺に戻るんだ。

彼女は。

ここは、俺の通っていた「伯藤学園」

そして彼女もここの学校の生徒のはずだ。

同じ制服に身を包んだ女子が横をすり抜ける。

でも、彼女の学年のクラスって…

俺は、彼女を見たことがなかった。

だから同じ学年ではないと思うんだけど…

正直自信が無い。

違う中学から着てる奴が多いし

俺の学年は、特別人数が多い。

はっきりいって全然生徒の名前を覚えてない。

彼女の友達にでも会えれば良いんだけどなぁ…。

でも、いまだ俺に話しかけてくるような友達らしき人はいない。

居ない以上は、教室にいけない。

とりあえず一年生の廊下をうろうろしてみるが話しかけられる気配

はない。

…しょうがない。

屋上にでも行って暇をつぶすか…。

もしかしたら彼女にも会えるんじゃないかという淡い希望を持ちながら俺は、屋上に向った。

――――――――――――――――――――――――

サァァ―――――――…

扉を開けたとたん勢い良く風が飛び込んできた。

まぶしい太陽。

白を主とした屋上の景色。

グランドを悠々と一望できる。

漠然とした思いが湧き上がってきたその時だった。

「やっぱり来たんだ」

俺の声だった。

振り返ると俺がいた。
俺の姿をした彼女。
今は、俺が彼女の姿をしているのだからそのはずだ。
「よかった。来なかったらどうしようと思ってたんだ」
にこっと笑う。
しかし俺には、それを笑顔で返す余裕はない。
「…あの時の夢、本当だったんだな」
「今頃気づいたの？」
「そりゃそうだろ。俺は、あの時の事を夢だと思ってたんだから」
「夢だよ」
…？
あれは、夢だったはず…。
「あれは、夢だよ。紛れもなく君の夢。
君の夢の中に私が入り込んだだけ。それも勝手にね」
俺の声から紡ぎ出される意味の分からない言葉の数々。

今の姿が本当の自分の姿ではないと嫌でも再認識させられる。

「入り込んだって…どうやって？」

「簡単よ？言ったでしょ？私は、普通じゃないって」

始めて彼女にあった時、確かにそんなことを言っていた。

「説明になってないだろ。

それに何故？何故俺と入れ替わった？」

「君じゃないといけなかったんだ」

「他の人じゃダメだったのか？」

「当たり前だよ。絶対に君じゃないといけないの。どうしても」

…意味、わかんねぇ。

そんなことを言われるとよけい混乱する。

はっきり言って今、俺の脳は働いていない気がする。

どうしたんだよ…。

もしかしてこれも夢？

俺が作り出したたちの悪い夢なのか？

そんな訳、ないか…。
一人で考え込んでしまう。
長い沈黙が訪れる。
その沈黙を破ったのは、彼女だった。
「一週間だけ、君の身体を貸して欲しいの」
「…は？」
「だから、貸して欲しいの。君のこの身体を」
「…意味…わかんねぇんだけど」
そもそも入れ替わったのだってただの興味本位だ。
いきなり身体を貸して欲しいといわれても困る。
「どうしても必要なのよ。だからお願い」
お願いといわれても…。
だいたい…
「何に使うんだ？俺の体」
「…大切な人を…取り返すために」

「取り返す…？」

「うん。天国からね」

「は…？」

天国？

天国って人が死の後に向う場所…。

「神様は、あたしから大切な人を奪っていった」

「…事故か何かか？」

「違う。彼は、死んだんじゃない。

連れて行かれたのよ…」

「ふうん、神様がそんなことするのか？」

もちろん冗談半分だった。こんな言葉。

振り回されてることに腹が立ったのだ。

「するよ。平気でね。知ってる？

直らない病気とか不慮の事故とか…。

あれの大半が神様の気まぐれなんだから」

「…っ？」

「びっくりしたでしょ？」

そりゃそうだ。

世界で起こる悲しい死が神様の気まぐれだったなんて…。

ていうか、ふざけてる。こんな話。

「でもあたしの場合は、特別ね。

あたしは、人間じゃないから」

神様とそれから。

「人間じゃ…ない…？」

「そうよ。私は、人間じゃないの」

人間じゃない？

「じゃぁお前は…誰なんだ？」

問いかけてみる。

人間じゃない物、それはいったいなんだ？

「そうね…神様に逆らった天使…とでもいっておこうかな？」

「天使…ずいぶんメルヘンチックな言い方するな」

「そうでもないわよ、ちょっと言い方はおかしいけどこんな感じ。

つまり神様に嫌われてるのよ、あたし」

また話がとんでもない所に飛んでいった。

嫌われるてる？神様に？

だいたい神様が人間を嫌って良いのかよ…。

確かにこいつは人間じゃないけど。

「で？神様に嫌われるとどうなるわけ？」

「…本当に聞いちゃって良いの？聞くと後には引けなくなるわよ？」

…後に…引けなくなる？

「…どういう意味だよ？」

「そのままの意味よ。

あなたは、あたしに身体を貸さざる終えなくなる、そう言う意味よ」

貸さざる終えなくなる？

そんな訳ねーだろ。

そんな簡単に人に身体を貸せるかよ。

「いいよ、聞いてやるよ。

その理由って奴を」

「良いのね？じゃぁ全部説明するわ」

ただでさえずっとこの身体なんだ。

説明を聞かないわけには行かない。

「あたしはね…ある天使の仕事で人間界に来たの。
あなた達人間には悪いけど、その時は人を不幸にする仕事だったわ。
…でも、あたしは不幸になるはずの人間を…不幸に出来なかった」
…出来なかった。
簡単に人と身体を入れ替えられるような奴がか？
「…好きになっちゃったのよ…。
その人間のことが」
「…え…？」
俺は、心底驚いていた。
天使が人間に恋をする。
結構ありそうな話だけど神様とか天使とか
そういう存在のことすら信じていなかった俺にとっては
理解しがたい話だ。
しかも天使が恋？
余計現実味がなくなってきた。

もう少し現実味のある話がしたい位だ。

でも、今は信じるしかない、

俺が選ばれた理由も分からないし自分の身体もない。

今の俺には何も出来ない。

「…その後、どうなったんだよ」

「え？」

「その後、お前等はどうなったかを聞いてんだよ」

「その後…あたし達は…いや

あたしが不幸に出来なかった人は…

はっきりとどうなったかは分からない。

今わかってることは、その人の事を世界中の誰もが覚えてない。

それだけよ」

…そんなことあるかよ。普通。

神様がそんなことするのかよ。

俺達は、そんな世界に住んでるのかよ。

…やっとわかった気がする。

あいつが後に引けないっていった理由。

真実

確かに…後に引けなくなってしまった。

「でも、あたしだってただで貸して欲しいなんていわないわ。

一つ条件を付ける」

「条件？」

「そう。条件聞く？聞かない？」

条件…。

天使が人間につける条件…そんなもの俺には検討もつかなかった。

「聞くと必然的にあたしにこの身体を貸すことになるけど」

身体を貸す…。

普通なら戻ってこないときの事を考えて拒否するべきだろう。

…だけど。俺の気持ちはもうすでに決まっていた。

何故だかは分からないけど。

「いいぜ、聞いてやるよ。

この身体だっていくらでも貸してやるよ」

何故だか俺はそんな気持ちになっていた。
今までにはない、不思議な感じだったけど
今だけはその感情に従ってやることにした。
「…ありがとう。恩に着るわ。
じゃぁ、話すわね」
彼女・もとい天使は一息置いてから話を始めた。
「あなたに…天使の力の全てを譲るわ」
「は？」
イキナリの事。
もっと分かりやすく話して欲しい。
「つまり、天使としての重い役割だけは私が背負う。
あなたは天使としての絶対的な力だけを手に入れる。
そういう事」
「天使の…力？」
こんな風に人と強引に入れ替わってみせたり…

たぶんこういった力の類いのことをさしているのだろう。
「俺は…別にかまわないけど…
君はそれでも大丈夫なのか？」
「…大丈夫なはずないでしょう？
でも、今の私にそんなこと関係ない。
目的を果たすこと、それが今の私の全てなんだから」
「…ずいぶんすごいことを言うんだな」
面食らうぐらい、俺にはすごいことに思えた。
これからのことをまったくと言って良いほど省みずに
一時の感情に身を任せて動く。
これは彼女の性格的な理由なのか、
それとも天使が皆そうなのか、俺には分からなかった。
というより、少し恐怖さえも感じていた。
周りを一切遮断するような目。
こんな奴を俺はほおっておいていいのだろうか？

そんな考えが湧き上がってくる。

「君たちに人間には理解できないかもしれないけどあたし達にとってはなんでもないことなの。

それぐらい…天使は覆らないような信念を持ってる。

それがもし覆ったら…今のあたしみたいになるでしょうね」

そう言い放った彼女はとても悲しげだった。

儚ささえ感じるほどに。

そんな思いが俺を突き動かしていたのかもしれない。

「それで…俺は具体的に何をすれば良いんだ？」

「特にあなたのすることはないわ。

ただこの身体を貸して欲しい、それだけ」

「本当に何もないのか？」

「だからないって…いや、一つだけ…あるかもしれない」

彼女の迷ったような声。

戸惑いの色を隠しきれていない。

「一つだけ…あなたが真実を知りたいなら」

「真実？」

「えぇ…考えられえないほどに冷酷な…紛れもない真実よ」

選択。

「真実…ねぇ。

でも、それが俺にどう関係があるんだ？」

俺に思い当たる節はない。

一様まっとうな人間をやってきたつもりだし

天国に関わった覚えはもうとうない。

「そうね…、今は教えられないけど

絶対にあなたに関係する事だって事は保証するわ。

知って損はないけど、知ることによってあなたの中の何かが

壊れる可能性がある。

その辺は絶対とは言い切れないけど。

君、結構現実味ないことは信じなさそうだし」

「…悪かったな」

俺に…関係あること。

気になるけど俺が壊れる。

この身体を貸すだけじゃすまなくなるって事か？
そんなのはもちろんごめんだけど俺に関係のある真実…。
気になっているのは確かだった。
思い当たる節がなければないほどその思いは膨らんでゆく。
「それじゃあ例え俺が真実を知りたいといったら
君はどうするんだ？」
「もちろん連れて行くわ。君には知る権利があるもの」
「連れて行く…？」
「あれ？言ってなかった？
あたし、これから地獄へ行くの」
「じっ地獄！？」
普通天使なら天国へ行くべきなんじゃないのか？
それに天使が居る地獄って…。
とても創造できた物じゃない。
「天使はね、この世界から帰ってくるとき一人だけ天国へ連れて行

っても

よさそうな罪人を連れてゆくの。

そうしていかなければただただ地獄に罪人が増え続けて

三つの世界の均衡が取れなくなる。

この世界の均衡を保つのも私達の仕事なのよ」

「三つの世界の均衡…」

てことは常に俺達の世界はこの天使達に守られてるって事か。

今考えてみればのんきなものだ。

「私はまだ一様天使の力を継続し続けているから

その規則だけは守らなければいけない。

でもあなたは…」

「俺は？」

「あなたが地獄を通り抜けるのは難しいかもしれない。

普通の人間は罪人の世界に落とされでもしたら地獄の一部として取り込まれるわ。

罪人のみが地獄でその身の原型を留めていられるの。

だから常に罪人たちは我先に助かろうと人間を狙ってる。
それがあなた達の世界で言う妖怪ね」
「なんか突拍子もない話になってきたな」
実際には天国ってのも厳しい規則で縛られてるし
結局の所どの世界も大変みたいだ。
「それでも行く？危険を犯してでも行くことはないわ。
あたしは結局の所あなたの体が借りられれば良いんだから」
「…」
行くか行かないか。
行けば少なからず俺に得られる物があるのだろうか？
きっといかな方が居のだろう。
…でも。
行かないわけには行かない。
そんな気がしてならないのだ。
「どうする？」

俺はきっと行くだろう。

初めからわかってた。

いや、初めから自分の心が決まっていたのかもしれない。

「分かった。俺も行くよ」

天使の力。

彼女はニコっと笑ってこういった。

「あなたならそういうと思ってた」

それは本当に彼女が天使なのだと認識させるような微笑だった。

しかし、それもつかの間。

「じゃぁ、移すわね。あたしの力」

「え？」

「だって、今の状態じゃ君の体に力が宿ってることになっちゃう。

それじゃ、君の体を借りた意味がないでしょ？」

そうか、本来の俺は何の力も持っていない。

ってことは力だけでも俺に移さなくちゃいけないことになる。

「でも、移したら君が困るんじゃないのか？」

「ううん、それは大丈夫。

力だけはあなたが持っている事になるけど、

認識上では私が天使のままだってことには変わりはないわ。

あたしは完全な人間の体にならなくちゃいけない。
だから、認識上はよくても力だけは手放さなくちゃいけないの」
「そうか…」
十分この状況にも驚いてるのに、さらに難しいことになってきた。
でも…もう後戻りは出来ない。
「分かった。移してくれ」
「…ありがとう」
かすかにそれもつぶやくようにそういった彼女は、
俺の胸に手をかざした。
そして、それは呪文のように始まった。
『汝の魂よ…我に宿りし地の力…
百華によりここに集え…琥珀の太陽よ…今解放せよ、
そしてこの指先に…』
ゆっくりとつむぎだされる言葉とともに
少しずつ光のようなものが指先に集まり始める。

それは白とも青ともいえないような淡く美しい光だった。

『我に集いし力…今、封印せよ』

そして、その光は俺の胸へと入っていった。

「…もういいよ、動いても」

「あぁ、サンキュー」

なんだかすごく不思議な感じがした。

夢見心地とも違うようななんとも地に足が着かないような感じ。

でも、さっきの俺とは違う何かが俺の中にある。

「これで、その力は今俺の中になるのか？」

「うん、もうあたしには何の力もない。

ただの何もかもを失った天使。

でも、もういいの。

早く…早く行かなくちゃ行けないから」

よろしく。

彼女の口調はどうやらあせっているようだった。

チカラを移された自覚は俺には無いけどまず、やることは一つ。

「あのさ、悪いんだけど…。

俺の姿で女言葉はやめてくれねぇ？」

「え？あぁ、そっか。可笑しいよね」

ようやく彼女が顔をほころばせてクスクスと笑った。

俺も釣られて少しだけ笑う。

「でも、君も十分可笑しいよ？

だって女の子の姿で女の子の制服着てるのに口調が男の子だもん」

「そうだな…、でも今更口調変えるのには抵抗あるなぁ」

「じゃぁいいでしょ？

他の人の前でだけは外見の通りの口調にして二人のときだけは普段どうりってことで」

「…そうだな」

少しの間とは言え、これからはしばらくこの姿で生活しなければならないのだ。

出来ないようなら練習しなければいけないかもしれない。

これからは彼女の友達とも接しなくてはならないのだ。

出来るだけ彼女の口調を真似て…。

ん？彼女はいったいどこのクラスなのだろう？

よくよく考えれば俺は彼女の名前すら知らない。

彼女もおそらく俺の名前を知らないのだろう。

「後、君の名前は？

悪いけど俺、君の名前知らないんだ」

「そっか。

でも、知らなくて当たり前だよ。

もともとあたしはここの生徒じゃないもの」

「え？でも、ここの制服が…」

彼女は口元で人差し指を立てた。

するとふっと笑って今度は俺を指差す。

「今は君が持ってる力」

「は？」

理解が出来てない俺をじらすように手を後ろで組んで屋上のフェンスに寄りかかった。

「言ったでしょ？

天使の力は何でもできる、ってね」

…そういうことか。

ようやく悟った俺は彼女へと数歩近づく。

「『天倉　浩』だ。よろしく」

俺が手を差し出す。

「『宮野　葉月』です。よろしく」

俺の差し出した手を宮野か掴む。

制服を自ら作ったのか、

それとも何らかの方法で手に入れたのか。

でも、屋上にいるって事は転校生とは認識されていない。

彼女が何をやったのか、俺にはわからないけど

少なくともその程度のことは簡単だという意思表示だろう。

どうやら俺はとんでもない力を託されてしまったみたいだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0797g/

空の青は、青春の青。

2010年10月16日00時24分発行